

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 スケトウダラ

学名 *Theragra chalcogramma*

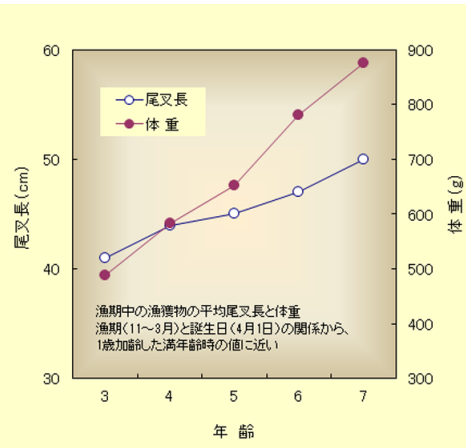
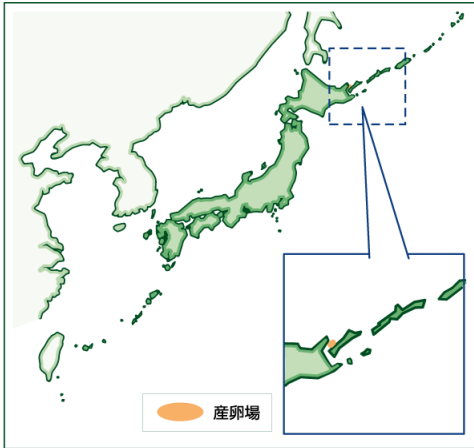
系群名 根室海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明(10歳以上)
成熟開始年齢: 3歳
産卵期・産卵場: 冬季(1～4月)、根室海峡
索餌期・索餌場: 産卵期以外は、オホーツク海西部と推測されるが未解明の部分が多い
食性: オキアミ類、カラマス類をはじめとする浮遊性小型甲殻類、本海域では、冬季に魚卵及び魚類を捕食している個体が多い
捕食者: 海獣類

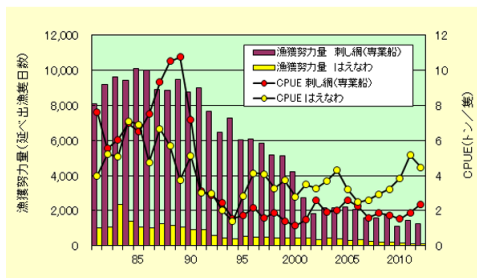
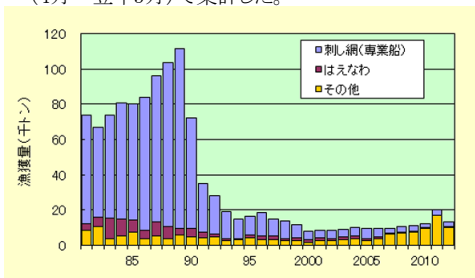


漁業の特徴

本海域では、刺し網漁業やはえなわ漁業などの漁業によって漁獲されている。操業期間は、はえなわが11～1月、すけとうだら刺し網の専業船が1～3月、その他刺し網が4～12月である。漁獲量の集計範囲は、近年の漁獲動向を考慮し、本年度評価から別海地区～羅臼地区とした。ただし2011年度については、根室市の歯舞地区の根室海峡側の海域での漁獲が多かったため、歯舞地区の漁獲量(太平洋側で操業する知事許可のすけとうだら刺し網およびすけとうだらはえなわ漁業の漁獲量を除く)を加算した。なお、隣接する海域ではロシアによる操業が行われている。

漁獲の動向

漁獲量は、1980年代は増加傾向を示し、1989年度に最高の11.1万トンに達した後、急激に減少し、2000年度には1.0万トンを下回った。その後、漁獲量は0.7～0.9万トン台で推移した後、2008年度には再び1.0万トンを上回り、2011年度は2.0万トンに急増した。2012年度の漁獲量は1.3万トンであり、前年を下回った。なお、漁獲量は漁期年(4月～翌年3月)で集計した。



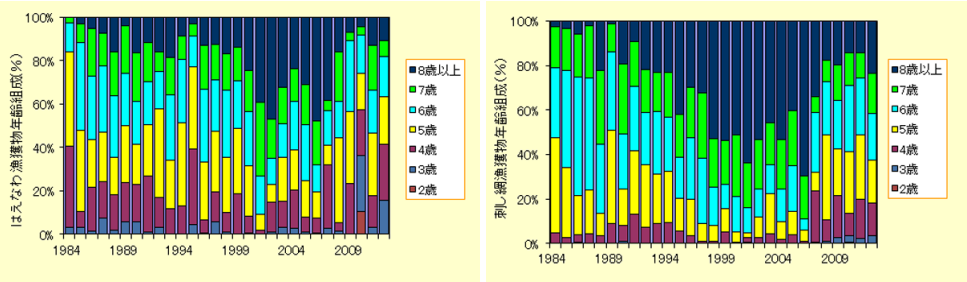
資源評価法

日本の漁業における漁獲量やCPUE、漁獲物の年齢組成が情報として得られている。一方、隣接する海域におけるロシア漁船の操業や漁獲物については断片的な情報しか得られていない。そのため、当該資源については既存の情報からは資源量の算定が困難であり、F値、漁獲割合、将来漁獲量の算定といった定量的な評価は行うことが出来ない。そこで、日本漁船による漁獲量やCPUE、漁獲物組成などを元に資源状態を推測した。

資源状態

総漁獲量を用いて資源状態を判断した。1981～2012年度の32年間の漁獲量の最大値11.1万トンと最小値0.8万トンの間を3等分して高・中・低水準とし、2012年度の漁獲量1.3万トンを低水準と判断した。また動向は2008～2012年度の漁獲動向から横ばいと判断した。なお、従来の主漁期である産卵期に行われている刺し網(専業船)およびはえなわの漁獲量とCPUEは、努力量の減少が見られるはえなわCPUEを除き近年5年間ではほぼ横ばい傾向にある。





管理方策

当該資源は、日本とロシア双方の水域を回遊し、日本とロシア双方がこれを対象に漁業を行っているが、ロシア側の詳細な操業実態は不明である。また、その生態も不明な点が多く、資源評価に必要な情報は限定的であり、資源量推定や来遊予測は困難である。これらのことから、当該資源についてはABCの算定は行わず、参考値としての算定漁獲量を提示することとめた。2014年度算定漁獲量として、ABC 算定規則2-2)により、資源の状態に合わせ漁獲を継続する $0.6 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.02$ およびその予防的措置である $0.8 \cdot 0.6 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.02$ を示した。

漁獲シナリオ (管理基準)	F値 (Fcurrentとの 比較)	漁獲割合	将来漁獲量		評価	2014年度 算定漁獲 量
			5年後	5年平均		
資源の状態に 合わせた漁獲 ($0.6 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.02$)	—	—	—	—	—	93百トン
資源の状態に 合わせた漁獲の 予防的措置 ($0.8 \cdot 0.6 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.02$)	—	—	—	—	—	74百トン

コメント

- 本評価群については、既存の情報からは資源量の算定が困難なことから、F値、漁獲割合、将来漁獲量の算定など、定量的な評価は行っていない
- 本海域のスケトウダラは主に産卵回遊群を対象にした漁業であり、日ロ両国で行われている
- 我が国の漁業による漁獲動向から、資源水準は低位と推測されることから、資源回復を図る必要がある
- 平成23年に設定された中期的管理方針では「ロシア連邦の水域と我が国の水域にまたがって分布し、同国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみの管理では限界があることから、同国との協調した管理に向けて取り組みつつ、当面は資源を減少させないようにすることを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、管理を行うものとする。」とされている
- 算定漁獲量における資源の状態に合わせた漁獲は $\text{ABCLimit} = \delta_2 \cdot \text{Ct} \cdot \gamma_2$ 、この予防的措置は $\text{ABCtarget} = \text{ABCLimit} \cdot \alpha$ で計算した
- δ_2 は低位水準の標準値である0.6、Ctについては当該資源は近年来遊状況に変化が認められ、また来遊量の変動も大きいことから直近3年間(2010～2012年度)の平均漁獲量(Cave)とした
- γ_2 は、 $\gamma_2 = 1 + k(b/l)$ から求められ、kは係数(標準値の0.5)、bとlは漁獲量の傾きと平均値(直近3年間)である

資源評価のまとめ

- 漁獲量は最盛期の1割程度の水準で低迷しており、資源水準は低位
- 2008～2012年度の漁獲量の推移から、動向は横ばいと判断

管理方策のまとめ

- ABCの算定は行わず、参考値としての算定漁獲量の提示とした
- これ以上の資源減少を食い止めることを管理目標とする必要がある
- ロシア側の漁獲状況の情報収集が必要
- ロシア側もTACを設定して漁獲規制を実施している

執筆: 田中寛繁・森 賢・船本鉄一郎

資源評価は毎年更新されます。